

## 展示会への観覧者参加の取り組み

岸本 弘人<sup>1)</sup>

### Action of the Viewer Participation in the Exhibition

Hiroto KISHIMOTO<sup>3)</sup>

#### 1 はじめに

沖縄県立博物館・美術館では、沖縄の日本復帰40年にちなみ、特別展「Okinawa から沖縄へ」を9月28日(金)から11月25日(日)まで開催した。

当館において沖縄の日本復帰をストレートに取りあげた展示会は今回が初めてである。展示は大きく復帰前と復帰後に分け、復帰前のコーナーでは、アメリカ統治下における沖縄の苦難や、平和憲法を持つ日本への復帰を目指した過程を中心に構成した。復帰後の展示では沖縄国際海洋博覧会等の巨大プロジェクトをはじめ、復帰後の様々な変化を示し、沖縄の今後について考えてもらうことを意図した。

沖縄が日本に復帰して40年が経過した今日において、当時の実体験を持つ世代とそうでない世代との間で復帰に対する意識や認識の差が生じているのは明白である。今展示会では、復帰前の状況や復帰運動を理解してもらうだけでなく、観覧者がこれまでの沖縄やこれからの沖縄について考え、意見を述べることができるコーナーを設けた。これは当館の目標の一つである「県民が親しみをもち、参加できる博物館」を具体化する取り組みでもある。

以下、実際に行った県民参加の展示を紹介する。

#### 2 写真公募「暮らしは歴史。」の実施

一般の方々の目線にとらえた現在の沖縄の姿を写真で募集し、それを素材として展示室の一部の空間を構成した。224点の応募作品の中から入賞、選外にかかわらず57点を選び、大きいものではB0サイズ程度に拡大して展示し残りを含めた全ての写真を

32インチモニター4台でスライドショー表示した。応募者には観覧料が割引になるダイレクトメールを出したこともあり、家族・親戚を伴って多くの方々が観覧した。

今回の写真公募は当館指定管理者である「文化の杜共同企業体」と綿密な連携を取りながら実施した。

#### 写真公募スケジュール

- ・告知 4月中旬～ポスター・チラシ
- ・応募期間 7/10～31日(19日間)
- ・応募方法 応募票とデジタルデータ(CD)と共にA4サイズにプリントし、ラミネート加工した上で提出。受付した作品は館内の無料スペースに随時掲示していった。
- ・応募区分 小学生以下の部、中学生の部  
一般の部
- ・入賞審査会 8月22日
- ・特別展での展示 9月28日～11月25日
- ・入賞者表彰式 10月27日
- ・応募作品数 224点

公募写真の展示は5年前に当館がリニューアルオープンする際にも常設展示室プロローグとして実施している。

今回の応募作品のうち、約90点は常設展示室の写真差し換える素材としても使用した。

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.



写真1 写真公募ポスター（2種類）  
（左）レンズをモチーフにした丸形ポスター  
（右）小中学校掲示用丸形ポスター



写真2 特別展示室内での展示風景（57作品）  
トンネルの内・外壁に写真を拡大展示



写真3 館内無料スペースへ全作品を掲示

### 3 「県民に聞きました」コーナーの設置

会場の最後に、あらかじめ設定した4つの質問に対して観覧者が意見を書いて貼り付けるコーナーを設けた。多くの方々が思い思いの意見を記入した。

- Q1．あなたが考える沖縄で1番のヒーロー・ヒロインは誰？（1人 or 1団体）
- Q2．将来の沖縄に残したいものは何？
- Q3．あなたにとって「復帰」とは？（15文字程度）
- Q4．復帰後のできごとを3つあげるとすれば何？

### 4 フェイスブックの立ち上げ

今回、当館では初めての試みとして展示会専用のフェイスブックを立ち上げ、外部に向かって発信できるようにした。iPadを2台設置し、観覧者が直接入力できるようにした。自宅のパソコンやスマートフォンからも入力できるようにしたが、観覧者がこれらのSNS（ソーシャルネットワークシステム）に慣れていないためか利用は低調であった。



写真4 「県民に聞きました」コーナーとiPadでの投稿コーナー

### 5 記憶に残る甲子園投票

春と夏の甲子園全国大会に出場した沖縄県代表校の中から、最も印象に残っている試合について、観覧者一人あたりシール1枚を貼る投票を実施した。復帰前から様々な面で本土に立ち遅れていた沖縄では、本土に対するコンプレックスを甲子園での勝利によって晴らすという側面が少なからずあった。「大臣が出るのが先か、甲子園優勝が先か」といった話が出るほどに、沖縄県民が甲子園での県勢の試合によせる思いは強い。県代表校の試合がある時には、仕事そっちのけで一喜一憂する県民性は良く知られている。観覧者には程度の差こそあれ、県代表校の試合における思い出はあるはずで、他者の投票

と自身の思いを重ねてみることでより展示に関心を持ってもらうことを意図した。

投票対象の選択肢は1958年の首里高等学校の初出場から、2010年の興南高等学校の春夏連覇まで、印象的な試合12を博物館側で選び、10歳ごとに区切った一覧表に各人が1枚だけシールを貼るようにした。シールを貼った人数は1253名で、来館者4795名の約26パーセントであった。また、〈私の思い出〉として一覧表から外れた試合や、当時の自分の生活や思いなどを付箋紙に書いて貼ってもらったところ、71名が参加していた。



写真5 「記憶に残る甲子園」のコーナー

## 6 「観覧者のエピソード」募集

当館では、来館者の観覧を助けるために簡単なワークシートを作成している。本展示会では従来のスタイルにかえて、展示資料にまつわる個人のエピソードが記載されたパンフレットを作成し入場の際に配布した。エピソードは当館のボランティアスタッフに寄せてもらい、パンフレットの制作は担当学芸員の監修のもと、指定管理者「文化の杜共同企業体」が全面的に行った。展示キャプションとは違って、市民生活レベルでの思い出が紹介されており観覧者に好評であった。観覧者が自分の思い出やエピソードを書いて提出すれば抽選で次回展示会の無料観覧チケットが当たるようにした。提出者は16名と少なかったが、アピールをもう少し工夫すれば提出が増えたかもしれない。



写真6 入場時に配布したパンフレット

## 7 おわりに

以上、本特別展における観覧者参加の取り組みを紹介してきた。これらの取り組みが観覧者数の増加にどの程度貢献したかは正直よく分からない。しかし、参加型の展示を中心に地元のNHK放送局が、夕方のニュース枠で取上げたことで一定程度の効果はあったものと思いたい。

写真公募については5年前の開館当時よりも応募数は増加した。応募者へのアンケートを見ると、博物館に展示されるということに対して魅力を感じての応募が多数であった。質問の回答貼り付けや高校野球の投票では、観覧者がわりと積極的に参加していたように感じた。

博物館に敷居の高さを感じる県民はまだ多い。学術的な成果を公開するのが博物館の役割であるが、一方では社会教育施設として教育普及的な役割も期待されている。今後は、そういった点も踏まえ、より親しみが持てるような工夫をしていくことが大切であろう。